

新光社發行 昭和三年十一月 預約價金二圓八〇錢

本篇はアメリカ合衆國の總説と東部に關するもので、執筆者は渡邊萬次郎、新渡戸稻造、太田正孝の三博士を初め、鶴見祐輔、神川彦松、大山卯次郎、平井正之、水野恭介、淺野一男、宮武繁諸氏のアメリカ通である。寫眞版の豊富なこととはイタリヤ篇に劣る所がなく、且つ明瞭な地圖が數葉あることは地理を知得する上に甚だ便利である。たゞ寫眞版を増さんが爲めか同じものの違つた寫眞又は同種類のものが多く押入してあるのはうるさい。寫眞を精選すれば觀る者の感じを強くするので効果が大きくなる。發行は遅れても編纂の確乎たることをこの良き出版物の爲めに望んで止まない。然しこの一篇を以てアメリカに關する地理風俗の概念は充分に獲得することが出来る。(N)

○人文地理學講義(上卷) 西龜正夫著 古今書院發行

定價三圓四十錢

著者は廣島第二中學校の校長である。予は著者と面識がないが、古く歴史と地理や、地球誌上での、誌友である。篤學の人である。人文地理に關した論文を書かれたので、記憶を逸しない人である昨年末に近刊としての廣告が出た時から刮目して之を見んことを欲したところ、この一月の十五日いかにも芽出度い目に、本書が生れた。同君の獨力苦學の半生に對して篤い敬意を表し、併せて本書の出現を祝福せずには居れない。本書は菊版四七一頁、序論と人類地理學、人口地

新著即報

理學、生活地理學、交通地理學の四篇を收めてある。挿繪も四十一圖印刷も鮮明である。生活地理といふ語は聞く丈けで生硬な感がある。けれども居住の外に飲食、衣服、光熱等を論じたから、致方がなかつたであらう。ハンチントンの人文地理學講話などに比べて本書の内容がいかにも廣く蒐集され説明されてゐることを知りうると同時に、あまりに廣きにすぎるといふ恨がないではない。しかし今日まで我等が手にした多くの人文地理學書、もしくは論說から、要を集め粹を抜いて、こゝまで簡明に纏めた著者の努力は多としなければならぬ。古い人生地理學から、最近の地理學評論に至るまで、凡そこの方面の文獻は、殆ど網羅されてゐる。中には「ア、かうしたことといつか見たな」と、追回するやうな零細なことが記されてゐるので誠にうれしく懐かしい氣がする。單に零細なことはかりではない、必要な文字も集まつてゐることは勿論である。強て難をいふではないが、人類地理學の中に於ける「大和民族」の一章を例にとれば明かなやうに、結局多くの學説が簡單に紹介されてゐるに過ぎない程度であるのを恨みとする。しかし著者には別に人文地理學に對する體系があり抱負がある。讀者はさうした同君の態度から、多くの學ぶべきものを得るであらうことを信ずる。妄言多罪(藤田)

新著即報

○大阪 第五卷第一號 昭和四年一月 淀川の三角洲 (石井信一)

○朝鮮 第二六四號 昭和四年一月 海東諸國紀とその地圖に就いて (中村榮孝)

○東洋學藝雜誌 第四五卷第一號 一月 結晶學と數學 (中村清一)

○火成岩の話 (一) (坪井誠太郎)

○北海道石炭鐵業會々報 第二十二號 一月 檜前火山の爆發 (渡瀬正三郎)

○Great Britain. Essays in regional geography.

By Twenty-Six authors. Edited by Alan G. Ogilvie. University Press, Cambridge. 1928. 11Yen (丸善)

○Proceedings of the Imperial Academy, Tokyo, IV, No. 9. 1928.

Tertiary foraminiferous rocks of Taiwan.

(H. Yabe and S. Hanzawa)

Remarks on the genera Annulariopsis,

Lobatannularia and Annularites: (H. Yabe and

K. Koizumi)

○Science Reports of the Tohoku Imperial University.

Second series (Geology), Vol. XII, No. 1. 1928. 5Yen

A Summary of the Palaeogene stratigraphy

of Kyushu, Japan, with Some accounts of the fossiliferous Zones. (T. Nagao)

Palaeogene fossils of the island of Kyushu, Japan. Part II. (T. Nagao).

On some rock-forming Algae from the Younger Mesozoic of Japan. (H. Yabe and S. Toyama).

○Nature. Vol. 122, No. 3083. Dec. 1, 1928.

Fossils and stratigraphy (J. P.)

Polar Geography (R. N. R. B.)

○Science. Vol. LXVIII, No. 1771. Dec. 7, 1928.

The Planetesimal Hypothesis (F. R. Moulton)

○Geologische Rundschau. Bd. XIX, Hft. 5, Dec. 1928.

Der Aufbau der Erdkruste in Europa. (B. Gutenberg)

Das Wachstum der Kontinente nach der

Zyklistheorie. (Schluss). (E. Kraus).

○朝鮮鐵業會誌 第一一卷第四號 昭和三年十二月

黃海道安岳鐵山(島村新兵衛)

廣南道統營郡光道面竹林里スレフスルニ鐵床調査

文(大崎謙一郎、田中彌太郎)

○Grundzüge der Geologie. Von F. X. Schafer.

Franz Deutsche, Leipzig und Wien. 1928.

5Yen30 (丸善)

○Asie des Moissons. 1^e partie. Chine-Japon. Par Jules

Sion. (Géographie universelle. Tome IX.) Librairie Armand Colin, Paris. 1928.

○*The Geographical Journal*. Vol. LXXII, No. 6.
Dec. 1928.

Caravan Routes of Inner Asia. (Owen Lattimore).
From the Tien Shan to the Altai.
(R. C. F. Schomburg.)

○石油時報 第六〇〇號 昭和四年一月

石油の探検と地震計 (伊木常誠)

油田に施行された物理的探検法の成績 (大村一藏)

○朝鮮地質調査要報 第八卷ノ一 朝鮮總督府地質調査所
昭和三年十一月

忠清南道牙山郡溫陽溫泉調査報文 (立岩巖)

平安北道雲山郡溫井溫泉調査報文 (立岩巖)

忠清北道槐山郡永安堡溫泉調査報文 (立岩巖)

黃海道龜津郡馬山溫泉調査報文 (川崎繁太郎)

○地震 第一卷第一號 昭和四年一月

關東並に近畿地方に於ける地震活動の循環と大震前の諸
現象とに就て (今村明恒)

シリカ傾斜計 (石本己四雄)

○史蹟名勝天然記念物 第四卷第一號 一月

名勝としての松島(一) (小倉博)

日本列島に於ける熱帶性並亞熱帶性植物の自生北限
(竹中要)

○神戸附近の海岸に於ける海陸風調査報告 (八鍬利助、小野
英雄、大喜多重三) 海洋氣象臺彙報 第一九號 神戸海

新 著 即 報

洋氣象臺 昭和三年十一月

◎人文地理學講義 上卷 西龜正夫著 古今書院發行 昭和
四年一月 定價參圓四〇錢

○*Bulletin of the Geological Society of China*. Vol. VII.
No. 1. June, 1928.

Les roches éruptives Post-Palaeozoïque du
nord de la Chine. (Teilhard de Chardin),

La composition minéralogique et chimique

de roches éruptives et particulièrement

des lavas Mésozoïques et plus récentes

de la Chine orientale. (A. Lacroix).

Upper Palaeozoic formations and faunas

of Yaojing, Chenhsien, S. Hunan. (S. Chu).

The canon of marine transgression in Post-
Palaeozoic times. (J. S. Lee).

◎Bausteine zur Geopolitik. Von K. Haushofer, E. Obst,

H. Lautensach und O. Maull. Kurt Vorwinckel

Verlag, Berlin-Grünwald, 1928. 4Yen (九錢)

○地學雜誌 第四一年 第四七九號 昭和四年一月

火山の形態と構造(一) (佐藤傳藏)

岩手縣東磐井郡薄衣村附近の地質に就て(一)(齊藤文雄)

蒼鉛礦と其產地並に蒼鉛礦から見た日本及支那(五)

(植村癸巳男)

秋吉臺カルスト(石灰岩景觀)(六) (佐藤傳藏)

地球

第十一卷

第三號

三篇

七二

本邦油田に於ける温泉(三) (千谷好之助)

岩手縣二戸郡荒澤村産のモルデン沸石(豫報) (川井景吉、木下龜城)

○岩石礦物礦床學 第一卷第二號 二月

苗木産黄玉の光學的及熱的研究 (神津徹祐、上田潤一)
硫化金屬膠臘液の乳濁計的研究(二) (渡邊萬次郎、中野長俊)

本邦沿海底泥土中の特殊なる結粒(高橋純一、八木次男)
ラウエ斑點によりて求めたる苗木産黄玉の軸率 (高根勝利)

土佐吉野産陽起石の光學的、熱的及化學的觀察(神津徹祐、八木次男、可兒弘一)

接觸礦床に於ける週律沈澱の一例(渡邊萬次郎)

本邦に於ける火山岩の分布(二)(神津徹祐、渡邊萬次郎)
石油生成の機巧(一) (高橋純一)

○日本鑛業會誌 第四五卷 第五二五號 一月

鑛床學上より見たる金銀乾式分析法の缺陷と其補填法 (久原幹雄)

雨龍炭田に於ける燐新介炭化石層に就きて(小石源藏)
○*Nature*. Vol.122. No.3082. Nov. 24, 1928.

The Palaeozoic Mountain Systems of Europe and America. (E. B. Bailey).

○世界地理風俗大系 第十七卷 アフリカ 東京新光社 昭和三年十二月 預約價二四八〇錢

○地理教育 第九卷 第五號 二月

南アメリカ經濟地理 (下田禮佐)
アルゼリーに於ける土人の居櫛 (田中阿歌磨)
エトナ火山と其の噴火 (田中館秀三)

鹽原温泉地方にて觀察された地形の二三に就て (田山利三郎)
大阪平野の發達(五) (伏見義夫)

會津盆地に於ける聚落の一考察(下) (山口彌一郎)
○地理學評論 第五卷 第二號 二月

隱岐島前の收畑 (石田龍次郎)

房總半島南部の海岸段丘 (渡邊光)

我が殖民地に於ける内地人入移民 (武見芳二)

鹽原火山と地體構造との關係 (矢部長克)

故理學士長谷川新二君を弔ふ (下村彦一)

○鑛業 第六卷 第五九號 一月

西から東から朝鮮を觀る (吉村萬治)

鑛業地理學草案(續) (渡邊萬次郎)

黒鐵々床に關する從來の研究 (福井陸男)

○*Bulletin of the Chemical Society of Japan* Vol.4, No.1. Jan. 1929.

A Pink Kaolin (Takizoline), and Ruthenium as a minor Constituent of the Tanokami Kaolins. (Satoyasu Iimori and Jun Yoshimura).

○*The National Geographic Magazine*. Vol. IV. No.1.

Jan.

Mapping the Home of the Great Brown Bear.

(Thomas A. Jassar)

○東洋學藝雜誌 第四五卷 第二號 二月

火成岩の話(二) (坪井誠太郎)

ライプツヒ及びハルレ兩大學の地理學教室 (西田與四郎、今村學郎)

○臺灣時報 第一一〇號 一月

臺灣の地理學的區分(一) (移日妙光)

○史蹟名勝天然紀念物 第四集 第二號 二月

天然紀念物としての地質鐵物の保存に就て(佐藤傳藏)

○都市地理研究(人文地理學報第一輯)人文地理學會編 二月

刀江書院發賣 一圓五〇錢

風景形態としての都市 (小田内通敏)

都市的人口集團の地域的實在 (小田内通敏)

濱松市の都市地理學的考察 (佐々木清治)

中世末期の關東に於ける都市の發生過程 (鳥羽正雄)

近世大阪が有する聚落類型の探求 (佐古慶三)

米の集散と都市 (川口丈夫)

大都市の地盤と都市計畫 (江畑弘毅)

○歴史地理 第五三卷 第二號 二月

地形變動と史蹟 (今村明恒)

○北海道石炭鑛業會々報 第一七三號 一月
方位の話 (山崎守作)

雜 報

雜 報

○滿洲に於ける支那移民定着の増加

滿洲に於ける山東直隸苦力及其家族の移住に就ては最近各方面の注意を喚起する様になつた。今過去五箇年半に於ける滿洲支那移民の定着力の消長如何を表示すると次の如くである。

年次	移 動	入滿者數	離滿者數	差引定着	定着率%
大正十二年度		三〇一、六六八	二四〇、五五五	一〇一、七三三	二九・六
大正十三年度		三五四、七〇〇	二〇〇、〇四六	一四四、六五四	四八・〇
大正十四年度		四七三、六八六	二七〇、七六六	二〇二、三三三	四七・七
大正十五年度		五八六、七五五	三三三、六九四	二四三、〇三三	四一・八
昭和二年度		一、〇三二、九四三	三三三、五九九	七〇〇、四三三	六六・五
昭和三年度		五七四、〇八八	一五七、〇九八	四一六、八九八	七二・六
上 半 期		三、三六二、一〇一	一、五〇〇、七五九	一、八六一、三三三	五五・六
合 計					

右表の如く年々入滿數が増加し、昭和二年度に至り前年度に比し八〇%の大激増を示した。之等入滿者は大連、營口、安東及奉天を經由するが大連經由の入滿者が過半數を占めて居る。而して過去五箇年半に支那移民の滿洲渡來數は約三百四十萬人一箇年平均移住數は約六十萬人で、其旺盛な移住力